

八代市での水害写真資料レスキュー支援

本年7月の豪雨災害では人的被害だけでなく多くの文化財も被災しました。特に本年は新型コロナウイルス感染症の流行が重なり、外部から救援に入ることもできず、発災後約1ヵ月は文化財の被害調査や救援ができませんでした。

こうした中、被災文化財の救援に着手した熊本県教育庁から「埋蔵文化財記録写真資料が水没」と連絡が入り、対処と救済について助言するためメールでのやりとりののち、8月17日～18日に現地にて対処法の詳細について検討・協議しました。

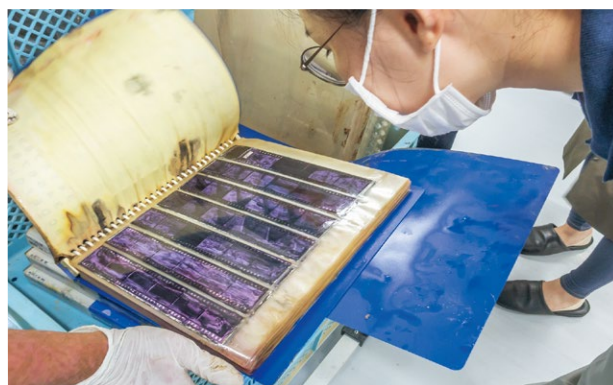
八代市の文化財資料が収蔵されていた施設は、建物の1階部分がほぼ水没してしまいました。水没部分に写真資料を収納したキャビネットが並んでおり、水が引いた後も先述のとおり救出まで1ヵ月近くかかりました。

写真フィルムが河川水に水没した場合、バクテリア等の微生物が写真の画像を形成する「乳剤」を腐敗させてしまうため、すみやかに洗浄・安定化する必要がありますが、1ヵ月あまり着手できなかったため、多くの資料は救済不可能でした。

このような中で現地入りして検討したレスキュー内容としては、①救済できるかできないかの選別、②救済できるものは冷凍保存で腐敗停止、③資料内容の重要度順に救済処置（洗浄～安定化～乾燥～デジタル化～収納）といった流れです。

文化財の災害については記録類も同時に被災することが多くあります。特に写真資料については非常に脆弱で、日頃から防災意識を高めて収蔵場所や環境に注意する必要があると改めて感じました。

(企画調整部 中村 一郎)



被災した白黒フィルム 腐敗し救済は不可能